

漁業冬の時代を乗り切る知恵

三二巻き網船団で 効率的に水揚げ

資源減少、少子化による担い手不足、燃料価格高騰など、厳しい時代に直面する水産業の生産現場。そんな現状を乗り切っていくと、八戸市の水産会社・福島漁業(福島哲男社長)が将来を見据えた国内初の取り組みにチャレンジしている。徹底した資源管理下での効率的な水揚げを目指す第88総獲丸(三〇〇ト)を本船とする三二巻き網船団だ。今年四月の操業開始から五カ月が過ぎたが、同社では「採算的には当初の狙い通り」と確かな手応えをつかんでいる。

八戸・福島漁業

善き網船団はマグロやカサゴ、イワシ、サバなどの魚種の大規模漁獲を狙う。本船は網船としての本船、探査船「探索船」、漁船「運搬船」二隻の「カ統」より、ほとんどが撤退。福島の漁業の三方銃が残るだけ八戸港が数十万ト規模の水

なる(「福島全良専務」が六億七億円で下がるものを見込まれている。

このような意向から、老朽化した従来の「カ統」を更替した。船団には凍結設備を新設し、市況の動きを察知した効率的な水揚げが可能となった。ヘッドルームをはじめ乗組員の居住空間の充実を図り、少子化が進む中で将来の女性の職場進出に備えた。作業スペースを拡大し、安全性向上も図っている。

将来見据え新たな挑戦

揚げを請った十五年以上前までは、同港にも十カ統以上が所属していた。船団は全体の乗組員数が五十人以上で、船数も多く、燃料コストもかさむ。年間

「今後はかつてのような大量漁獲は望めない。コストを極力抑え、資源を保護しながら少ない漁獲量で高効率型」を当初の目標として、一カ統当たりの採算ライン

1カ統4隻体制→2隻に コスト削減に大きな効果

福島専務は「広い作業スペースを確保したのは、将来的に作業の機械化が進むと考えると、機械化が進めばさらに省力化され、少ない乗組員でも操業が可能だろう。すべてが十五年前を見据えた取り組みだ」と強調する。

実際、新船団を導入した四月以降は、人件費は当初計画通り四割減。カツネ、マグロ漁を中心に操業中だが、三二船団化で水揚げ能力自体が低下した上に、漁は五、六月のマグロ漁が予想外の不調だった中で「水揚げの効率化により、金額的には前年比三割減にとどまっている」と(「福島専務」)という。

近年の燃料(A重油)の価格高騰にも十分耐えられた。燃料削減効果も証明できた。燃料価格が昨年比一・五倍にも達し、従来型の船団が採算ラインの上昇に頭を悩ませる中で、三二船団の燃料経費は従来船団比二・五割減で済んでいる。

「燃料価格は今後、世界の消費量が増える中で、上昇することはあっても大きく下落する事態は考えにくい。三二船団化の必要性が業界で本格的に論じられてくるとは思えない。さまざまな課題を抱える業界だけに、八戸から始まった民間会社の新たな挑戦が、今注目を集めている。」

将来見据え新たな挑戦

掲げを誇った十五年以上前「今後はかつてのような
までは、同船にも十力統以 大量漁獲は望めない。コス
上が所属していた。 トを極力抑え、資源を保護 船団全体の乗組員数は三
船団は全体の乗組員数が しながら少ない漁獲量で高 十人(本船二十三人、運搬
五十人以上で、船数が多く、 減。当初計画では、年間の 船七人)で、四割以上の
燃料コストもかさむ。年間 漁業にシフトしなければ 減。当初計画では、年間の
で初めて一体的に備えた。



国内で初めて導入された2隻体制巻き網船団の本船である第88恩実丸



第88恩実丸の操業風景。漁獲したカツオを船倉に收容し、市況をにらんだ凍結販売も可能になった＝福島漁業提供